

夏の谷に遊ぶ(2)

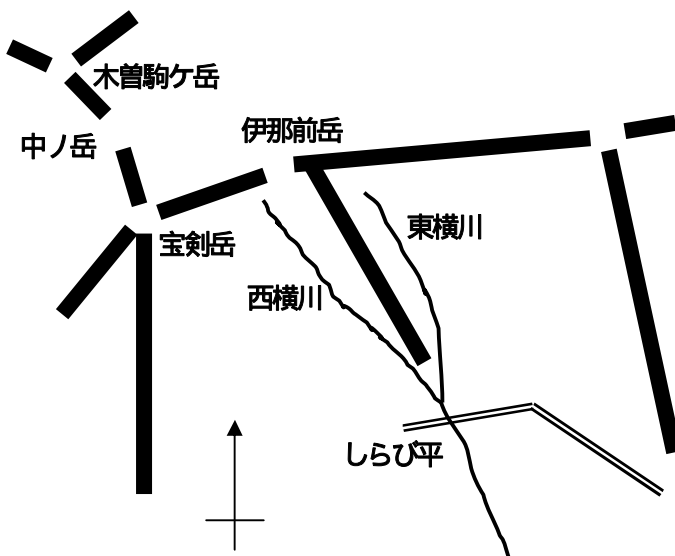
--- 中央アルプス・中御所谷東横川 ---
(2008年7月の記録)

秋田 誠

日 程：7月26日(土)晴

メンバー：L 秋田誠、谷内資康、高田忠雄(彷徨倶楽部)、管宏(雪稜会)、谷内里美(山友会)、小関紀子(岳友会)

タイム：入渓点(標高1,670メートル)8:05 --- 東横川出合20メートル滝8:30~8:45
--- 下部ゴルジュ出口の滝上9:45~10:00 --- 第一の雪渓下(標高2,000メートル)11:00 --- 第二の雪渓上(標高2,200メートル)12:00 --- 伊那前岳稜線登山道(標高2,750メートル)15:30~16:00 --- 北御所谷バス停18:30



千畳敷に向かう登山客の好奇心な視線を背に、しらび平ロープウェイ駅からバス道を5分ほど戻ると横川に架かる橋である。左岸の草付きの中の急な踏み跡を降り、飛び石伝いに流れを渡って堰堤の基部で遡行準備を整えた。

東横川出合までは平凡なゴアの河原が続く。途中、堰堤が2ヶ所あるがいずれも右岸から越えた。2つ目の堰堤は足場が崩れやすいドロ壁で、意地悪なことにドロ壁から堰堤に移る部分の、ちょうど手掛かりが欲しくなる場所に、タラノ木だろうか棘だらけの灌木が私たちの闖入を拒むかのように生えていて痛い目に遭った。

左岸に枝沢を見送ると間もなく東西の横川の分岐となる。両岸とも岩壁を発達させた東横川は、立派な20メートルの滝を懸けて出合っている。明るく開けた谷に滑滝を連ねる西横川とは対照的である。昨年、同じ時期に西横川を遡行した際に垣間見た東横川のF1は水量が多く随分と威圧的だった。しかし、実際登ることになって滝の下に立って観察してみると、丸味を帯びたりツジ状に張り出した左壁は極端に傾斜の強い部分はなく、逆相気味だがホールドは十分ありそうだった。後続メンバーが難渋するのなら上からロープを降ろせば良いだろうと判断して、アンザイレンはせずにそのまま壁に取り付き登り始めた。朝一番の滝登りだったので、みんな身体が固そうだったが特に困難もなく落ち口に揃うことが出来た。滝の上にはさらに3~4本の滑滝が連なり、出合の滝とこれらの滑滝はあたかもひとつの大きな滝のように一体となって水を落としていた。滑らかな岩肌に溪流足袋のフリクションを確かめながら流れを乱して快適に高度を稼いだ。

滑滝を過ぎると両岸が迫り、ゴルジュの中にくいくい登れる5~10メートルの滝が連続した。標高1,900メートル付近でゴルジュは終り、大岩が堆積する開けた谷となった。大岩の上を飛び石伝いに登ると、やがて正面から細い流れのガレ沢を合わせて谷はやや左に向きを変えた。本流には崩れ

た様相の25メートルの滝が懸かっていた。落差があるので水流の右手を慎重に登り落ち口に立つと、谷幅は狭くなり上流には5～10メートル滝が続いているのが望まれた。

標高2,000メートルで雪渓が現れた。水でも飲みに沢に下ってきたのだろうか、右岸の茂みの中に大きなカモシカが1頭、私たちの動きをじっと見つめていた。雪渓は長さ30メートルほどで谷を埋めていた。雪渓は流水によって大きく抉られていたが安定しており、直ちに崩れる危険はないように思われたので、崩落に用心しながらひとりずつ足早にくぐって通過した。標高2,200メートルで再び長さ30～40メートルの雪渓が現れ、同じようにくぐって通過したが、その先で断続する雪渓が谷を埋めていた。雪渓の上を歩くのは危険だったので、しばらく右岸の灌木の中を谷に沿ってトラバースして進んだが、やがて張り出した大岩に行く手を阻まれてしまった。雪渓が残っていることは想定していたが、思いの外残雪が多かった。一直線に稜線に向かう谷の上部は、雪渓に埋もれていた。

このまま谷筋を辿るのは困難で時間もかかると判断し、谷から離れることにした。右岸の尾根に出るべく水の流れている細いリンゼに取り付いた。標高2,250メートル付近であった。落石に注意してリンゼを100メートルほど登ると開けた草付きの斜面となり、この斜面をトラバースすると安定した伊那前岳の肩から東横川に向かって東南東に伸びる尾根の背に立つことが出来た。谷の上部は雪渓で埋まっていたので長谷部新道を探すのは諦め、そのまま尾根の藪を漕いで山頂直下の登山道に出た。



東横川 F1 20m



雪渓出現



雪渓下を通過